

明治初期における東京の塾の発達

—近代日本教育制度の発達—

名 倉 英 三 郎

一

明治五年八月に学制が頒布されるが、その直後に東京府は管内の私立学校・家塾に対して教育状況の明細調書を提出させている。その布達の全文と日附は不明であるが、学制第一章「官立私立ノ学校及私塾家塾ヲ論セス其学校定ムル所ノ規則及生徒ノ増減進否等ヲ書記シ毎年二月学区取締ニ出スヘシ」（以下略）にもとづいて、東京府が各校に達したものであろう。

東京都都政史料館に『開学明細調 明治六年一月』七冊と『私立学校明細調 明治六年五月調』一冊とが保存されている。

『開学明細調』には明治五年秋から六年秋にかけて届出された「家塾明細表」と「私学明細表」が、『私立学校明細調』には六年の半頃に提出された「私立学校明細調」が綴り込められている。

「家塾明細表」「私学明細表」「私立学校明細調」のそれぞれの布達の詳細が不明であるため、文例は明記しえないが、「家塾明細表」の記載事項は次の通りである。

家 塾 明 細 表

第何大区何小区

明治初期における東京の塾の発達

一

明治初期における東京の塾の発達

何町何丁目何番地借地地主など

塾主

何 某

壬申何歳

(学歴・経歴・開業年代など)

塾名

位置(第何大区何小区何町何丁目何番地借店など)

学科

教授書籍

教授読書

生徒人員

六歳以上 九歳迄

男何人
女何人

十歳以上 十三歳迄

// //

十四歳以上 十六歳迄

// //

十七歳以上 十九歳迄

// //

総計

何人

内 男 何人

女 何人

右之通相違無之候也

壬申 何月

何 某

「私学明細表」の記載事項はほぼ同一であり、「私立学校明細調」には教師人員と、学科毎・華士族平民の男女生徒人員の項とが加えられている。

『開学明細調』によると家塾は九八三校、分塾・出張所が六校、私学は一校あり、計一、〇〇〇校となる。

『私立学校明細調』には四八校の届書がみられるが、『開学明細調』と重複するものが二七点あるので、残りの二一校分を採り上げる。

二つの明細調から一、〇二二校を数えることができる訳である。しかしこの数は当時東京にあった私立学校・家塾の実数を正確に示すものではない。明細表を届出るべきことが達せられてもそれを怠ったもの、無関心であったもの、あるいは知らずにいて届出なかったものも多かったと推理されるので、実際にはこの数を超えていたであろう。学制第四章にもとづく文部省布達第三四号（明治五年一〇月一三日附）による開業願書が『開学願書 明治六年二月』および『開学願書 私学之部 明治六年』として都政史料館にみられるが、それには一、一四一校が数えられる。このことから明細調の数字は実数を下廻るものといえよう。註一

なお、明細調と『開学願書』との異同を整理することによって、事実にも近い数字を捕えることも可能であろうが、しかしそれもあくまでも近似値を求めることにとどまる。

ここでは同じ主旨で書かれた『開学明細調』と『私立学校明細調』とを資料として、そこに見出される問題を探り上げ、当時の東京における私立学校・家塾全体の傾向を捕え、特殊性を明らかにしようと思う。

私立学校・家塾の校数は前記の通りであるが、本稿では校主・塾主についても考察するので、分塾・出張所六校を統計から除いて合計一、〇一五校を対象とする。

当時官立学校以外の教育施設の呼称には、学制にみられるように私立学校・私塾・家塾があり、また普通の寺子屋とか筆学舎、あるいは私学・私学校などがあるが、明細調における使い方は必ずしも統一されてはいない。「日本教育史資料」私塾寺子屋表にみるように私塾と寺子屋との区別を設けることも困難であり、届書の頭書によって家塾・私学・私立学校に区別することも無意味と思われるので、ここではそれらの呼称に拘らずにいずれも単に塾と呼んだ。

二

当時の行政区画は大区小区に分けられ、東京府は六大区一一五小区となっていた。学区としては東京府は第一大学区に属し、大学本部となっており、府内は行政区画に準じて六中学区一一五小学区となっていた。

第一大区は今の千代田区の一部と中央区で、他の五大区は第一大区を中心として外へ放射状に分けられており、第一大区が神田町屋・日本橋町屋・京橋町屋を含む純然たる市街地であるのに対し、他の大区は武家地・寺社地を主とする市街地（朱引内、御府内）と農村の性格をもつ郷村地（朱引外、御府外）との合体であった。

明細調の屈文例にみられるように、学校位置の記載は第何大区何小区となっており、『開学明細調』の綴りも中学区によって分けられている。しかし中学区は市街地と郷村地とが機械的に組み合わせられているために、都市的性格のものと農村的性格のものが混合することになり、第一中学区からは一つの特徴を見出すことができるにしても、他の五中学区からは異質的なものが混合した状態が発見されるにすぎない。江戸・東京の発達の仕方からも、教育的性格の相違からいっても各中学区を二つに分ける方が望ましいと思われる。「郡区町村編制法」（明治一一年七月）により同年一月から実施された一五区六郡の区画によるのが便宜であったので、区郡の名称を用い、それによって分類することにした。（なお市政は明治二二年五月一日に施行された。）

明細調の学科の項の記載の仕方は多様であって、それに従って分類すると細分化されすぎて全体の傾向が捕えがなくなるため、第一表のように一二種に整理した。

「筆読」は筆道・筆学・筆学指南・素読（和漢素読・漢籍素読）・読書を主とし、算術・算学・和算を併せ教授するもので、読み書き算盤を教授するいわゆる筆学舎・寺子屋・手習指南所である。「筆道・漢学（支那学）」と記載するものも「筆読」の塾とした。和漢筆道・皇国筆道・唐様筆道といった書道塾もあるが、これは専門の塾として取扱うべきものであったが今はここに数えた。

教育内容を教科書をもって示すと、いろは・千字文・名頭・国尽・往来物・教訓物、漢籍では三字経・孝経・小学、「四書五経ヲモ応請」じて教授する程度である。和算では教科書名を挙げることなく、加減乗除・「金銀米銭等」の利息算にとどまっている。読書算の他に「西洋アルハベット二十六文字」「西洋数字」「西洋翻訳書類」を教授するものが数例ある。

「漢学」は漢学・支那学・儒学・経書・経史などである。

「皇学」は皇学・皇朝学・皇語学・国学を指す。教科書には古事記・日本書記・神皇正統記・国史略・日本王代一覽などが用いられる。

なお「皇学・漢学」「皇朝学・支那学・筆道」のように学科が二以上のものは「漢学」もしくは「皇学」に加えた。

「算学」は算学・和算・関流数学・天元など、「医学」は本道・漢方医学・折衷医、「画学」は支那書画の教授、「釈学」は仏教学である。

ただそれが僧侶教育のためだけのものではなかったのか、それとも説法よりは高度の世俗人のための仏教教育であったのかは明らかでない。

これらのほかに心学（芝西応寺町竜江堂、日本教育史資料にも掲載）と兵学を講ずる旨を記載するものがあるが、筆道・算術などと並べてあるので「筆読」「漢学」に編入した。

以上が和漢学の系列に属するものであるが、これに対するものに洋学の系列がある。

「洋学」は英学・独学・仏学、あるいは二、三カ国語を組み合わせた学科である。しかし蘭学という文字は既にこの資料のなかから消えてしまっている。ところで英学・仏学あるいは洋学という用語の概念はしばしば指摘されるように曖昧であるが、ここでは学科に書込まれた文字をそのままに用いることにし、いわゆる洋学という概念に包括されるものはこれに入れた。しかし明細調をみてゆくと、**「西洋学」**あるいは**「洋学」**という場合と、**「英学」****「仏学」****「独学」**という場合とは差違のあることが窺われる。前者は翻訳書によって西洋の知識を学ぶことであり、後者はその外国語を学ぶこと、あるいは原書を講読することである。また後者にあつては英学などのほかに英語学、英文学と記載する塾もあるが、これには教育内容からみて二つのタイプがある。その一は「綴字・習字・読本・会話・文法・作文」を主とする語学専門のもの、第二のタイプは語学の学習のほかに「歴史・地理・究理学・地学」などの研究を行うものである。従来の洋学はこのタイプに属するものであろう。第一のタイプの洋学塾がいくつか見出されるようになったが、このことは洋学の学習の目的や形態が変ってきたことを示すもの

である。註二

「洋算」は西洋算術・筆算と測量算術である。

「洋医」は西洋医学・法朗西医学などである。

洋学系列のなかに「農学」と「化学」が見出される。

「農学」は法朗西語学と農学、「化学」は独逸学・究理学・地理学と化学を教授する舎密学伝習所である。

「和漢洋」は和漢学の系列の一あるいは二、三学科と洋学とを併立させるものである。これには三つの型があり、第一は筆読・漢学・皇学の塾で文明開化の時代的要求に同調して洋学の初歩を教授するようになったもの、第二は洋学を主としながら一般教養としての和漢学を併設しているもの、第三はそれぞれを専攻のコースとして並べているものである。しかし「洋学」も「和漢洋」も学科によって細分することなく一括して示した。

第一表は一五区六郡の塾を学科別に集計したものである。

区内に七八一校、郡部に二三四校、合計一、〇一五校(分塾・出張所を含まない)ある。面積は区内は郡部の四分の一にも当たらないが塾数は三・三五倍あり、非常に高い集中度を示している。

一五区中、日本橋区は一六校で最も多く、浅草・芝・神田・京橋・下谷・本郷・本所が続ぎ、五〇校以下は牛込・深川・小石川・麴町・麻布・四谷の六区で、赤坂区が九校で最下位になる。

六郡は南葛飾・北豊島・荏原・南足立・東多摩・南豊島の順となる。

なお各区の塾の発達の状況を説明するためにはそれらの人口・住民層・居住地域の発達・経済事情・寺院などとの関係のなかで述べらなければならぬのであるが、本稿ではそこまで手を広げることができなかったので概括的な説明をつけるにとどまった。

区内で塾の多い区は神田・日本橋・京橋・芝・下谷・浅草であるが、神田・日本橋・京橋の三区は前述のように早くから開けた町屋を含み、商工業地帯として人口も稠密であったためである。下谷区は広小路・御徒町・練塀町を中心とする地域に、浅草区では墨田川に沿う橋場町・

第一表

明治初期における東京の塾の発達

	筆読	漢学	皇学	算学	医学	その他	和漢洋	洋学	洋算	洋学 洋算	洋医	その他	計
麴町	16	6	2	2			1	4		5	1		37
神田	47	2	2	2	3		9	3			1		69
日本橋	80	1	2	7	9		4	8	2	2	1		116
京橋	46	1	1	2	3		2	3			1		59
芝	42	7	1	1	1		7	6	4	4	1	1	75
麻布	18	5								2			25
赤坂	4	2	2				1						9
四谷	14	3		3			1	1					22
牛込	23	10		1	2		2	5		1	1		45
小石川	25	7	1				3	1		3			40
本郷	40	2					3	3	1	1			50
下谷	40	3	3	2	2	1		2	2	3			58
浅草	65	2	2	2		1	4	3		2			81
本所	41	2	1	1	1		2		1			1	50
深川	34	4	2	2	1		1			1			45
区内計	535	57	19	25	22	2	40	39	10	24	6	2	781
荏原	47	1											48
東多摩	12		1										13
南豊島	13												13
北豊島	56		2		1								59
南足立	39	1			1								41
南葛飾	56	1		1					1	1			60
郡部計	223	3	3	1	2				1	1			234
総計	758	60	22	26	24	2	40	39	11	25	6	2	1,015

今戸町・山之宿・花川戸、そして田原町と阿部川町に多かった。芝区では東海道筋の町家の軒が連なるところに集っているが、この区の特徴は明治年間に入って和漢洋・洋学塾が急増したことである。

大名屋敷や武家屋敷の多かった区では塾数は少ないが、漢学塾が多いことが目立つ点である。

御所や官有地の多かった赤坂区は僅かに九校にすぎない。「日本教育史資料」で明治五年当時開業中のものをみると寺子屋が二校あるにすぎない。

郡部については一郡ずつ説明するための材料をもたないが、六郡中最も塾の多い南葛飾郡では本所・深川両区に接する地域に多いこと、東海道・甲州街道・中仙道・奥州街道の四宿、品川・新宿・板橋・千住の近傍の民家の聚った地帯に多いことに気附く。なお郡部は郡ごとに見るよりも農村的性格をもつ一つの地域として考察しよう。

郡部の教育状況が農村的性格のものであったということは、前述のように塾の所在が広い地域に点在していたことと、「筆読」塾が圧倒的に多かったこと、塾主に平民が多かったこと(第二表)によって察知することができる。

区内と郡部とを比較すると、区内が極端な都市的性格を持つのに対し、郡部は地方的農村的性格をもっている。東京府を単一体として塾の総数を示すことはできないにしても、それだけでは東京の教育の発展の相を正しく認識することは不可能である。むしろ区内と郡部とは二つの相異ったものとして考察することが必要であり、また前述のように区内は多様性をもつものとして、郡部は一様なものとして捕えるべきであろう。

「筆読」は区内では全塾数七八一校のうち五三五校、六八・五%、郡部では二三四校のうち二二三校で九五・三%を占めている。初等教育としての役割をもつ「筆読」の割合が郡部では極めて大きかったこと、区内では中等以上の教育施設が多かったことは二つの地域の性格の相違をはっきり物語るものである。

区内で「筆読」の多いところは塾数の多かった町屋地の広い区である。神田・日本橋・京橋・芝・本郷・下谷・浅草と、堅川など縦横に走

る掘割に沿って町家の多かった本所区である。

「漢学」は武家地の広い麴町・芝・麻布・牛込・小石川の各区、割合で見ると特に麻布と牛込が多かった。それに反して「筆読」の多い日本橋・京橋などは相対的に「漢学」が少ないのは特徴的である。

「算学」は日本橋区が最も多い。東京の、日本の商業の中心地であったことの証左でもあろう。また「洋算」「洋学・洋算」を加えた一五区の数学塾のなかで見ると一八・六%がこの区に集まっていることになる。

「医学」もまた日本橋区が多くなっている。人口も多く繁昌の地でもあったために開業医も多かったことであろうが、商業の中心地であったというだけでなく、文化の中心をもなしていたためで、歴史の古い塾もあったもののようなのである。

「釈学」は浅草区に一校（日蔵道場、土岐善静）を挙げてあるが、なお「和漢洋」の箇所で述べる浅草本願寺の真宗東派学塾にもこれが置かれている。この学塾では皇学・支那学・筆道・英学・洋算も教授するとあるので、本稿では「和漢洋」に加えた。

芝増上寺や駒込吉祥寺などには僧侶養成のための道場があったのであるが、それは一般の教育施設とは全く異ったものとして考えられているので、明細調には現れることがなかった。

「和漢洋」は四〇校、五・一%で、神田・芝の両区、次いで日本橋・浅草に多い。これからも「和漢洋」のうちの洋学が一部の塾におけるものを除いては、専門教育であるよりも流行の波にのった教養学科としての性格をもっていたことが察せられる。

洋学系列は八一校、一〇・四%となる。なかでも芝区の一六校が最多である。これは一五区の洋学の塾の二一・三%を占めることになる。第二位に日本橋区の一三校、以下麴町区一〇校、牛込・下谷の七校、本郷・浅草の五校と続く。

「和漢洋」・洋学系列でみたように芝区には洋学塾が多く、さらに生徒数の圧倒的に多い塾がみられる。慶応義塾・鳴門塾・攻玉塾・勸学義塾はいずれも一〇〇人もしくは二〇〇人を越えるものであった。芝区におけるこのような現象は如何なる理由にもとづくものなのであろうか。

「和漢洋」と洋学系列の合計一二二校は、全体の二五・五%に及び、「筆読」を除く専門分野の塾数（二四六校）の五〇%を占める。しか

し洋学関係の塾の開業年代を第四表でみると、嘉永年間から始まり、慶応までの塾数はこの表に現われている限りでは極めて少い。それが明治に入ると急増する。明治五、六年の調査であるため、その以前に閉鎖された塾の数も開業年代も統計に現われないために生じた結果である。洋学史上著名な洋学塾であっても調査当時その姿を消しているものがある。筆道や儒学などの塾では親子相伝が多かったのは異って、洋学塾は一代限り、また幕末の政情とは無関係ではありえなかったから活動期間の短いものが多かったのであろう。

明治に入って文明開化の潮が高まり学事の勸奨が盛んに行われるに従って、三年、五年には倍増してゆくのであった。

三

第二表は区毎に塾主の身分職業を示すものである。塾主が必ずその塾の教師であったとはいえないが、二、三を除いては塾主即教師であったと見受けられる。また塾によっては塾主のほかに教師を雇っているものがある。それ故この表が教師の身分職業を表わすことを目的とするならば、その雇教師も含まなければならないのであるが、届書のなかには人数のみを記載するものがあり、その全体を知ることができなかったため、ここでは塾主にのみついて示すことにした。

塾主の分類は、個人と地域の団体（共立）と、個人を男子と女子とに大別し、男子を八、女子を三に分けた。これは明細調に誌されたものによった。なお明細調では身分の不明なものが男女ともに多かった（一四・六％）ので「日本教育史資料」私塾寺子屋表によって補った（六九名分）。

第二表で一五区の部をみると、七八一名中士族が三三六名で四三％、平民二五八で三一・八％となる。六郡では士族が三五名で一五％と少く、平民は一三五名で五七・七％と半数を超えている。すなわち区内では士族が平民より多いのに較べて郡部では平民が約四倍と多くを占めている。

平民の職業は、区内では商業が大部分を占めており、次いで雑業、職人がある。農業と記したのは他県出身者であった。郡部では商業、雑

第二表

明治初期における東京の塾の発達

	士族	神官	僧侶	医師	平民	不明	皇族	華族	共立	女子	計	女子		
												士族	平民	不明
麴町	25	1		1	6			1		3	37	1	2	
神田	28			1	15	12		1		12	69		9	3
日本橋	29	3		1	43	20		2		18	116		15	3
京橋	13	1		1	26	10				8	59		6	2
芝	28	4	2		29		1	1	2	8	75		6	2
麻布	14		3		6				1	1	25	1		
赤坂	7				1	1					9			
四谷	16				2	1				3	22		1	2
牛込	40				1	1				3	45	2		1
小石川	33		2		3					2	40	1	1	
本郷	25	1	2		15	2		2		3	50	1	1	1
下谷	23		1	1	23	4				6	58	2	4	
浅草	22	2	2	2	40	2		1		10	81	2	6	2
本所	20				24	1			1	4	50	1	2	1
深川	13	1		2	24	1				4	45		4	
区内計	336	13	12	9	258	55	1	8	4	85	781	11	57	17
荏原	4		8		33	1				2	48		2	
東多摩	4	2			6	1					13			
南豊島	6		1		4					2	13		1	1
北豊島	11	4	7		32	4				1	59	1		
南足立	2	1	9	1	28						41			
南葛飾	8	2	9	5	32	3			1		60			
郡部計	35	9	34	6	135	9			1	5	234	1	3	1
総計	371	22	46	15	393	64	1	8	5	90	1,015	12	70	18

第二表 A

	士族	平民		士族	平民
麴町	26	8	牛込	42	1
神田	28	24	小石川	34	4
日本橋	29	58	本郷	26	16
京橋	13	32	下谷	25	27
芝	28	35	浅草	24	46
麻布	15	6	本所	21	26
赤坂	7	1	深川	13	28
四谷	16	3	計	347	315

業は僅かで、圧倒的に農業が多い。なお明細調に平民とのみ記載するものは塾の経営を専業とするものであり、他の職種を書込んでいるものはその仕事の傍ら子どもを集めていたというように見做すこともできるが、今はそう断定するに十分な根拠はない。

僧侶についてみると郡部の三四名（一四・五％）に対して区内は一二名（一・五％）、人数は三分の一、割合は一〇分の一でしかない。一五区内には芝・浅草をはじめとして寺の数は非常に多かったのであるが、僧侶で教育に携わる例は非常に少なかった。これは江戸という都市の寺院・僧侶の社会的な役割が地方における場合と異っていたためであるが、また江戸においては教育は奉仕的な教化的事業であるよりも実利的な知識を伝授することによって利益を得る事業でもあったのである。東京における教育が一般的な啓蒙的なものから主知的な実利的なものへ傾斜をもっていたことを物語る。また寺が密集する地域ではそのために子どもが少く、開塾の必要も少なかったであろう。

僧侶の塾主は少なかったが、教室に利用される寺院は可成り多く、僧侶以外のもので芝増上寺や浅草寺の附近の寺院、坊を借りて教場とするものがあつた。

皇族や華族の塾主がみられるのも東京ならではのことである。これについては後述する。

女子の塾主は区内で八五名（一一％）にのぼる。この割合は全国で最高であろう。女子の士族は士族の母や妻で、平民には娘というのもある。女子では平民が約七〇％を占める。神田・日本橋・京橋・芝・浅草に多いのは都市の庶民教育においては女師匠が大きな役割を担っていたこと、また女子でも開業しえたという特有の事情があつたことを示している。だが郡部では女子が少く、五名（二一％）にすぎない。郡部は区内とは全く異つた条件のもとにあつたことがここにも現われている。

共立の塾とはその地区の戸長・町年寄・地主が連名で届出ているものを指す。なおこの共立の塾のうち、後に区内幼童学所と呼ばれ、六年の末頃になると公立の小学校へと発展してゆくものもあつた。

以上述べてきた区内における士族と平民との割合、僧侶が少いのかかわって女子が多いこと、皇族・華族の塾主がいたことなどはこの市の発達の特殊事情を如実に物語るものであつて、他の地方にはみられない現象であろう。

六郡は東京府に属してはいるものの、区内とは全く異つた構成をなしており、農村的な性格をもっていることが明らかである。

なお区内の士族と平民との関係を区毎にみてゆく。女子の士族・平民を加算した数字を第二表Aに示した。

士族が平民より多く、二倍を超える区は麴町・麻布・赤坂・四谷・牛込・小石川の六区、そのなかで牛込区は士族四二名に対して平民は僅かに二名、小石川は三四名に対して四名であった。このように士族の多い区ではその比が大きい、平民の多い区では京橋の二・五倍、日本橋・浅草・深川の約二倍とその比は小さい。神田・芝・本郷・下谷・本所の五区では両者は接近している。これは単なる数字の比較であるが、各区の武家地と町屋地、武家屋敷と町家の戸数や人口、明治に入ってからの変動、特に東京府士族と地方士族の職業の選択などとの関連のなかに更に詳細に説明されなければならない問題を含んでいるようである。

皇族は有栖川二品宮で芝烏森に第三番中学と称し、英独仏の三学を教授するとある。はじめ育英義塾と称していたが、五年一月に「中学教則ニテ教授致候ハハ第一大学区第三番中学ノ名称相唱候テ不苦候事」という第一大学区督学局の許しを得て、中学の名を用いるにいたったのである。「開学願書 私学之部 第巻」による。(二品宮とは熾仁親王である。

華族は次の通りである。

石見津和野藩龜井茲監(麴町下六番町 培達義塾・独乙学)

上野安中藩板倉勝任(神田佐久間町 共心義塾・和漢洋)

士佐高知藩山内豊範(神田箱崎町 海南私学・仏語学)

筑後久留米藩有馬頼成(神田蛸壳町 報国学社・和漢洋)

常陸下館藩石川総管・近江甲賀藩遠藤胤成(芝愛宕下町 勸学義塾・和漢洋)

陸中盛岡藩南部信民(本郷湯島天神下 共價義塾・英学)

備中松山藩坂倉勝弼(本郷湯島天神 補化学院・英学・数学)

東本願寺大谷光勝(浅草松清町本願寺境内・皇学・漢学・积学・英学)

四

第三表は学科別に塾生の身分・職業を整理したものである。

まづ区内を見ると、「筆読」では平民が最も多く（四〇・九％）、次いで士族（三二・三％）となる。女子を加えるならば平民は半数を超えて五一・四％となる。女子だけでは一五・三％である。

「漢学」は流石に士族が多く、八二・四％を占める。

「皇学」では平民が三分の一あるのは国学発達の特殊な事情にもよるものであろう。

「算学」は平民が五〇％で、しかもそのうちの半数は日本橋区にいた。第一表で同区の算学をみると七とあるが、その六人は平民であった。「医学」では士族が多く、医師が少くなっている。これらの士族は旧藩において医師をもって仕えていたものである。士族一六のうち「算学」と同様に日本橋区が六とあって、第一表の同区九名のうち六名が士族であった訳である。

「和漢洋」と洋学系列では士族が圧倒的に多く、洋学系列は七四％（八一名中六〇名）を士族が占めている。次に第三表を身分・職業別にみて、まづ士族の学科別百分比をとると次のようになる。

読	学	学	学	学	洋	学	系列	17.8
筆	漢	皇	算	医	和	漢	洋	

これで見ると士族で洋学方面に進出したものは二五％となる。前に洋学教授に士族が多いことを述べておいたが、また士族のなかでも洋学に関係するものの割合は高い。時代の要求に対して敏感であり、またそうならざるをえなかったのである。それに引きかえ漢学・皇学

第三表

明治初期における東京の塾の発達

	士族	神官	僧侶	医師	平民	不明	皇族	華族	共立	女子	計	女子			
												士族	平民	不明	
区	筆読	173	12	10	3	219	36			1	81	535	9	56	16
	漢学	47	1	1		7	1					57			
	皇学	9			1	6	2				1	19	1		
	算学	7				13	5					25			
	医学	16			2	2	2					22			
	その他			1							1	2	1		
	和漢洋	24				4	3		4	3	2	40		1	1
	洋学	26			1	4	4	1	3			39			
	洋算	9					1					10			
	洋学洋算	19				3	1		1			24			
内	洋医学	4			2						6				
	その他	2									2				
	計	336	13	12	9	258	55	1	8	4	85	781	11	57	17
	郡	筆読	30	8	34	5	132	8			1	5	223	1	3
部	漢学	1				2						3			
	皇学	2	1									3			
	算学					1						1			
	医学				1		1					2			
	洋算	1										1			
	洋学洋算	1										1			
計	35	9	34	6	135	9			1	5	234	1	3	1	

が凋落するのにも文明開化の潮が激しく士族の思想や学問観を改変した結果であろう。

それでは新しい思想・学問はどのような世代によって担われていたかを、本節の主題からはずれるが一見すると、「和漢洋」と洋学系列を除いた塾主の年齢は一〇代と七〇・八〇代は別として各年代の人数が略々均しい。これに対して「和漢洋」は四〇代が最も多く、洋学系列では次のように二〇代が最も多く、次いで三〇代である。

20代	53.8%
30代	36.6%
40代	9.6%

ただしこの百分比は南葛飾郡の二名を含み、年齢不明と一〇代の一名を除いて作ったものである。註三

士族以外では五〇代・六〇代もあるが、矢張り二〇・三〇代が多い。ここには新しい学問としての洋学と若い世代との関係、特に士族の青年層の場合、開国から廃藩に至るまでの社会の激しい動きが反映しているようである。単に彼らの学問的関心が新しい対象に移ったというだけでは十分な説明とはならないような問題が潜んでいるようである。

神官と僧侶は女子とともに庶民教育に当たっていたのであるが、反面それぞれに専務があったとはいえ新しい時代に対処しようとする姿勢はみられない。塾の数とも考えあわせると彼らはこの変革の時代に全く無策であって、指導性を欠いていたといえることができる。

医師のうち医学塾を開くものは洋医を含めて半数である。しかし多くの医家では医生・書生を抱えて伝授していたのであるから、潜在的な数字が多かったものと思われる。

平民の八四・九%（二五八名中二一九名）は筆道指南や素読の師匠であった。そのなかには出張所を設けたり、一〇〇人・二〇〇人の生徒をもったものもある。

また平民の「漢学」・「皇学」専門の塾が設けられていたのも東京の特徴であろう。これは町家の多い区に一あるいは二校ずつ分散している。「算学」は前にも述べたところであるが、平民の5%を占める。「洋学・洋算」と合せてれば、六・二%となり、庶民層にも高度の数学知識の所有者が多かったのである。

皇族・華族はいずれも洋学を学科に加え、数人の教師を抱え、あるものは外人教師を招へいして教授陣を整えている。

共立の「筆読」は麻布飯倉町の培其根と称する区学所である。明治三年四月に開業とあるが、その当時は個人経営でもあったと思われる。

また明治六年五月の届書によると区内貧民幼童学校と改称している。

「和漢洋」共立の三校は芝区の二、本所区の一である。これらは英学・訳書講読をあげているが、英学とはいうもののアルファベットの発音書き方、稍進んで単語を教授する程度であったろう。

その一つ芝三田四丁目春林寺の小学舎は明治五年四月開業とあるが、これも翌六年四月の文書の中で区内幼童学所と改まり、下等小学、上等小学の教科を教授する旨を記載しているのを見ることが出来る。

女子の塾主については前述の通り「筆読」が主である。「皇学」の一人は下谷御徒町至誠堂の日尾直子（淀藩士族）である。日本教育史資料には「和漢筆」となっている。「和漢洋」の二校は日本橋薬研堀の玉江屋能女の塾で、学科は筆道・英学・洋算を並べ、英国人教師一人がいた。生徒は一八歳以下で筆道生徒一六二（男六〇・女一〇二）、英学八（男五・女三）であった。

他の一校は芝桜田本郷町の水交女塾で、明治五年に開業、塾主は星野てる（一六歳）と小林まさ（一七歳）であった。生徒は男子六と女子一四で、女子のうち六名は一九歳から三〇歳までであった。

郡部ではいずれも「筆読」に集中しており、改めて説明することはないようである。ただ共立についてみると、龜戸村普門院に筆道塾育養舎が設けられており、届出人は戸長であった。これも六年二月に区内学校と名を改めている。

塾主の出身地についてみると、平民では東京を本籍とするものが多く、他県出身者が極めて少いので平民の説明を省略する。

士族の出身地を区と郡とを合せてみてゆくと、三七一名中東京府士族は二四二名(六五・三%)あり、次いで浜松県二二名(五・九%)、静岡県一八名(四・九%)がつづく。あとは新治県の七名(一・九%)のはかは三名乃至一名が四二県ある。府県の数は一府四五県である。東京府内であるから旧幕臣の東京府士族の多いのは当然である。地方出身者はもともと手習学問を業とした処士、定府のもの、藩お抱えの儒者、浪人者などである。

県名をここに列挙することはしないが、北は青森県、南は都城県まで全国にわたる。ただこれはこの時の偶然であったのかもしれないが、京都府と大阪府出身の士族がみられない。これに反して前記のように浜松県と静岡県の出身者は多く一〇・八%(四〇名)に及び、しかもそのうち一六名は洋学に関係している(「和漢洋」洋学系列八四校中一九%)。東京府士族も元をたせば浜松県・静岡県の出身、すなわち三河以来の譜代の武士であった訳である。この二県は生活的には東京と近かったのである。また洋学に多いのは沼津兵学校と無関係ではない。

五

第四表は科別の開業年代調である。区内で最も古い塾は浅草三間町坂井市郎右門の竜淵筆学舎で、一七四年間継続とある(日本教育史資料には坂井一郎、開業元祿一年とあり、開業年度も一致する)。日本教育史資料によると元祿以降享保・元文・寛延・宝暦(南足立郡)・安永・天明・寛政・亨和そして文化となるのに対し、明細調では元祿から寛政・文化へととんでいる。両資料を比較すると、明細調では届出る本人の開業年度を記載しているものがあるために日本教育史資料よりも年代が新しくなっているものがある。第四表は明細調にみられる年代を表わす。しかしこの数字は明治五年まで存続していた塾の数を表わすものであって、この時以前に廃業した多くのものについて知るための手がかりになるものではない。そのため各年間に開かれた塾数や存在した塾数を正確に掴むことはできないが、試みに天保年間一年平均開業数を見ると三・七校で以後漸次増加を辿り、文久・元治には減るが、慶応年間には二〇・七校となる。明治に入ると第四表下欄でみるように一層多くなり、明治元年・二年に対して三・四年は二倍以上の新設がある。

第四表

区内

郡部

	筆読	漢学	皇学	算学	医学	その他	和漢洋	洋学 系列	計	累加数		筆読	漢学	皇学	算学	医学	洋学 系列	計
元覽	1				1				1	1	文	1						1
政	2				2				2	3	化	5						5
保	12	2		1	3				15	6	政	7						8
化	40	5	2	2	1				52	21	保	6	1		1			7
天	24		1		3				26	99	天							8
弘	40	2	1	1	2		3	1	50	149	弘	11						11
嘉	48	2	1	2	5		3	2	52	214	嘉	12			1			13
安	11	3	3	1	2		1		18	232	安	4						4
万	27	5			3				35	267	万	23						23
文	8			2	1				9	276	文	2						2
元	49	8	1		3		1		62	338	元	22						22
慶	266	29	10	16	3	2	19	53	403	741	慶	126	2	3				134
明	5	1			1		14	19	40	781	明	4				2		4
区内計	535	57	19	25	22	2	40	81	781		郡部計	223	3	3	1	2	2	234
明治元年	27	5		1	2			4	39	39	明治元年	11						11
二年	33	3	2	1			2	1	42	81	二年	15						15
三年	71	10	2	1			1	2	87	168	三年	33						33
四年	67	6	4	3		2	1	10	93	261	四年	31	2					33
五年	68	5	2	10	1		15	41	142	403	五年	36		3	1			42

明治初期における東京の塾の發達

天保から明治五年まで約四〇年であるが、物情騒然とした慶応年間においても一年平均最低二〇校の開業がみられたのであるから、それ以前には毎年それ以上の数の新設があったとみることができよう。註四

ところで明治元年の区内三五校の開業については別の機会に検討しなければならないであろう。何となれば改元以前に開業しながらも年号を明治と記載したものがあつた、また「福翁自伝」に読むように江戸市中混乱の前後に何人がよく新たに教育の業を起すことができたか、慶応義塾のように「生徒は続々入学して来て塾はますます盛んになった」と同様なことが他にも数多くあつたのかということについて調査を必要とするからである。

累加数も示したが、閉塾したものについては不明であるから、これは存続するものの開業年代の累加数でしかないが、その当時の最低数を示すものといえる。

なお郡部の明治年間に開業したもののなかには下谷・浅草において先代より受け継ぎ、慶応年間に閉鎖し、郡部に移転して再開したものが二、三ある。この少い例から推理することは危険であろうが、慶応年間には戦禍を避けて閉塾したものが相当あつたのである。

洋学に関係ある塾は嘉永以後のものだけである。「和漢洋」の嘉永・安政・万延開業のものはいずれも皇学・支那学を主とするもので、明治になって、特に学制頒布をみてから洋学を加えたものようである。

洋学系列で嘉永年間に開業したのは芝森元町三瀧県士族山本甫文の西洋内科学・外科学の繕生塾である。（日本教育史資料には山本照明とある。なお生徒数は男七〇とあるが、明細調では一九歳以上の男子八名となっている。）

安政年間のもの一つは芝三田二丁目平民福沢諭吉の慶応義塾である。この統計では芝において安政年間に開塾と読まれるが、福沢が安政五年に開塾したのは築地鉄砲州においてであり、三田に移つたのは明治四年である。

他の一校は下谷金杉上町浜松県士族近藤用久の洋算・筆道の塾で安政六年開塾とある。

嘉永以前の洋学特に蘭学・洋医の塾、万延から慶応に至る間のものについて知りうるところは極めて少い。明治に入ってからからのものを第四表下欄でみると四年から急増し、五年には一月から八月までに一九校、八月学制頒布後、九月以降には二二校新設されている。

各学科とも明治に入って増えているが、医学塾だけは増加率が低い。医学が他の学問と違っていているためであろう。しかし洋医は六校中四校が明治に開かれている。

王政復古、版籍奉還、諸大名は華族となり、そして武士は士族と称せられる。四民平等が喧伝されるとともに士族の社会的・経済的な力は大きく変化していった。彼らを選ぶ職業は限られていた時代であるが、私塾の経営はその一つであった。そのなかでも筆道師範や漢籍素読は最も安易なものであったろう。第三表でみると士族の「筆読」塾は一七三校であるが、その五六・一％（九七校）は明治に入って設けられたものである。この数字は士族の「漢学」塾の四七校中二四校、五一％より多く、平民の「筆読」塾の四七・九％よりも遙かに多い。

明治の五年間の各年度における士族と平民の「筆読」塾開業の状況を百分率で示すと次の通りである。

	士族	平民
明治元年	11%	8%
二年	8	16
三年	22	31
四年	21	24
五年	38	21

平民は三年を頂点とする山型を描き、四年・五年と減少してゆく。これに対して士族は一年・三年・五年の点を結ぶ上昇線を描いている。

僅か五カ年の統計では判断のための十分な材料とはならないが、この二つの方向は士族と平民とが教職に対して将来どのような姿勢をとるか、少くとも明治初期における方向を暗示するものといえる。註五

なお右の表の士族は九七名、平民は一〇五名であるから右の数字は略々実数に近い。

六

洋学における外国語の種類を明細調によつてみると、前にふれたように英語・仏語・独語の三カ国語で和蘭語はみられない。三カ国語の教授の状況を塾数で示すと第五表のようになる。ただし外国語の記載のない洋算一校、洋医六校を除いた。

第五表

	英語	独学	仏語	英語 独	英語 仏	英語 獨 仏	計
語学のみ	24	7	4	2	1	1	39
洋算と	19	2		3	1		25
その他と		1	1				2
計	43	10	5	5	2	1	66

第六表

	英語	独語	仏語	英語 獨	英語 仏	英語 獨 仏	計
語学のみ	908	139	101	86	57	63	1,354
洋算と	1,008	96		177	104		1,385
その他と		21	55				76
計	1,916	256	156	263	161	63	2,815

英語は六六校中四三校、六二・一%となつており、二、三カ国のいずれにも英語が入っているのでそれを加えると六八%となり、独語は二一・三%、仏語は一〇・七%である。

つぎに外国語教師の数をみると次のようになる。ただし外国人教師を含み、一カ国語の塾の場合だけをみた。二、三カ国語、洋算その他と併せている塾では教授分担が明らかでないものがあったためである。

英語	四四名
独語	一〇名
仏語	六名

生徒数をみると第六表の通りである。

二、三カ国語、洋算を併せ教授する塾で生徒が何を幾人学んでいたかが明らかでないため、この統計から結論を求めることはできないが英語を学ぼうとする生徒が多かったということは窺い知ることができよう。

塾数・教師数・生徒数からみて、外国語の学習は英語への傾斜をもっていたことが明らかである。このことは「和漢洋」の塾における外国語についても全く同様である。

外国人の雇教師を抱えていた塾は八三校（区・郡合計）中一八校で、人数は二三名であった。一名が一五校、二名が二校、四名が一校である。外人教師四名をもつのは芝愛宕町東京府士族林欽次の法朗西学・農学教授の迎曦塾で、四名とは法朗西人三名・日耳曼人一名である。

「和漢洋」にあつては七校、一〇名である。註六

七

塾の規模の大小はその建造物や教師の人数、生徒数などで決められることであろうが、明細調には教場についての記録がなく、そのため教師と生徒の人数で判断する以外に方法はない。しかし生徒数の多少と教師の人数とは比例しないし、師匠の家族や年長の生徒が助教を務める例も多かったと思われるがそれを明示するものはない。生徒数にしても定日に登校するのが慣例であつたし、「此外諸懸人日々稽古ニ参り候」

といった例もあって「生徒人員」に記載された人数も確定的ではない。数カ月を隔てて『開学明細調』と『私立学校明細調』と両方に届け出ている数例をみても人数の記載は一致しない。慶応義塾の場合でも前者は三〇二名、後者には二五〇名とあり、前掲の迎曦塾でも五五名と三〇名と喰い違っている。また浅草新吉原京町にあり共懐義塾出張所（明治文化全集第二〇巻文明開化篇四八二頁吉原ノ学校）と称する日洗舎も二二名とも三六名とも報告している。教師についても同様に迎曦塾は外人教師を四名、後には二名としている。僅かの間に教師も生徒も交替していたとみなければならぬ。註七

しかし一定しなかったとはいっても生徒数はその塾の規模、その地域の教育が盛んであるか否かを示す標識であることのできるので、初等教育としての役割を果していた「筆読」の塾の生徒数を捕えてみる。

第七表は生徒数を一〇段階に分けて塾数で示したものである。

最大は日本橋川瀬石町の柳花堂（天保一三年開業、中野東三郎）の二六九名（男一四七名・女一二一名）と神田旅籠町の芳林堂（安政四年開業、金子治喜）の二六七名（男一三九名・女一二八名）である。芳林堂は日本教育史資料にもあり、これには明治四年調査で教師男女各一名、生徒三〇〇名とある。

規模の大小を決める基準はないが、生徒数不明の三校を除く五三二校について五〇人を境としてみると、五〇人以下が二六四校、五一人以上が二六八校と略々同数である。また一〇〇人で一線を画すると、一〇〇人以上は八二校で約一五％となる。しかし五〇人の前後に多いということは、当時の塾（寺子屋）の組織、経営の在り方と限界とを物語るものである。

暫定的に五〇人までを小規模、五一人以上一〇〇人までを規模の中なるもの、一〇一人以上を大規模ということにして各区の状況を見てゆくと、神田・日本橋・京橋の三区では大規模なものが多いのが目立つ。中規模の多いのは日本橋区と浅草区で、小規模が大・中の約二倍になっている区は麻布・四谷・小石川・下谷・本所である。一校平均の生徒数は三八名（小石川）から七四名（京橋）までで区内全体は五九名となる。

郡部についてみると小規模のものが八六・九％あり、大規模なものは僅か四校にすぎない。一校平均は二一名である。

明治初期における東京の塾の発達

第七表

	1~25	~50	~75	~100	~125	~150	~175	~200	~250	~270	不明	計
麴町	2	5	4	3	1		1					16
神田	7	17	6	3	4	6	1		2	1		47
日本橋	7	21	26	12	10	1	1			1	1	80
京橋	6	9	10	4	6	3	5		2		1	46
芝	3	18	8	6	4	1	1		1			42
麻布	5	6	4	1		2						18
赤坂	3					1						4
四谷	6	4	2		2							14
牛込	4	7	6	3	3							23
小石川	8	10	4	1	2							25
本郷	6	17	13	3			1					40
下谷	9	16	7	4	2			1	1			40
浅草	15	11	20	13	1	4					1	65
本所	13	15	8	3	1	1						41
深川	6	8	8	4	5		1		2			34
区内計	100	164	126	60	41	19	11	1	8	2	3	535
荏原	25	17	2	2	1							47
東多摩	1	11										12
南豊島	3	4	5		1							13
北豊島	27	23	4	1							1	56
南足立	20	8	7	2	2							39
南葛飾	26	26	1	1							2	56
郡部計	102	89	19	6	4						3	223
総計	202	253	145	66	45	19	11	1	8	2	6	758

なお大規模な塾の多い地域には共通した条件があるのは前述（第一表の説明）した通りである。専門教育としての漢学などの塾生数について、漢学と医学とをあげて比較すると第八表のようになる。

第八表

	1~50	~100	~150	~200	200~	計	不明
筆 読	264	186	60	12	10	532	3
漢 学	52	5				57	
医 学	22					22	
洋 医	6					6	
洋学系列	53	15	4		2	74	1

第八表 A

	19才以上の生徒
筆 読	0.94%
漢 学	27.3
医 学	71.7
洋 医	78.2
洋学系列	39.0

「漢学」塾では最大が八九名（下谷中御徒町大沼学舎）であり、安井息軒の三計塾は一四名、川崎魯輔の尚志堂は二五名、若松甘吉の尚友軒は四六名などであって、「医学」では二七名が最も多く、多紀養春の存誠塾は九名にすぎなかった。

漢学や医学が専門教育であったことは生徒数が少いことのほか、生徒の性別や年齢の割合からも明らかにすることができる。ここでは年齢によってみると、三学科のそれぞれの生徒のうち一九歳以上のものの百分比を出すと第八表Aのようになる。

医学は特殊な専門学科であり、高い知力と長い年限を必要とするものであったのである。

「和漢洋」の塾には前述のように初等と専門とがあり、また二、三学科を学ぶ生徒と一科のみ履修するものがあって、生徒数によって塾の内容を考察することは不適當のようである。そのためここでは省略した。

洋学系列については「洋医」を除いて生徒数を示すと第八表の通りである。五〇人以下の塾が多く、そのうち二五人以下のものが三七校ある。慶応義塾や鳴門義民の塾（芝露月町、二一六名、日本橋薬研堀に分塾がある）のような当時としては超大規模なものが数校あったにしても、多くは少人数の塾であった。それにしてもこの時代には洋学は鎖国時代の模索的な開拓的な学問でもなければ先覚的な少数者の所有物でもなくなっていたのである。

第八表で漢学塾の規模と洋学塾のそれとを比較すると、前者の凋落に対して後者は時代の寵児となっていたことが窺われる。これは「和漢洋」の塾についても同様のことがいえる。

洋学系列における生徒の年齢をみると、一九歳以上のものの割合は第八表Aのように三九%である。更に「洋学」「洋算」「洋学・洋算」の個々についてみると次の通りである。

学	算	31.5%
洋学	洋算	70.2%
洋学洋算		41.5%

外国語や西洋事情の学習が洋学のなかで一般的であったのに対して、西洋数学・測量算術は専門的であったのである。

八

明細調の学歴の欄には塾主がかって就いた師匠の名が記載されていてその数は多いが特に頻繁にみられるもの、著名なものを挙げてみる。

*印は明細調にある塾主を示すものである。

筆道では青蓮院門（西京粟田流、御家流とも）、芝泉堂坂川暘谷、東泉堂熊谷暘周、竜乗軒土肥丈谷*、聴泉筆学舎石川仰山*、巻菱湖、相宜樓市河三亥（子三兼*）、三余堂高斎単山*などである。

漢学では鷺津毅堂、古賀精一郎、安積良斎、佐藤捨蔵、松崎慊堂、川崎魯助*、安井息軒*、塩谷甲蔵などである。学校では昌平黌が多い。国学には平田鉄胤、権田直助の名がみられる。

洋学教師として福沢諭吉*、箕作秋坪*、同麟祥、中井幸太郎*、鳴門義民*、大鳥圭介、福地桜痴などが挙げられ、学校は開成所、大学南校、沼津兵学校、土木司測量所がある。

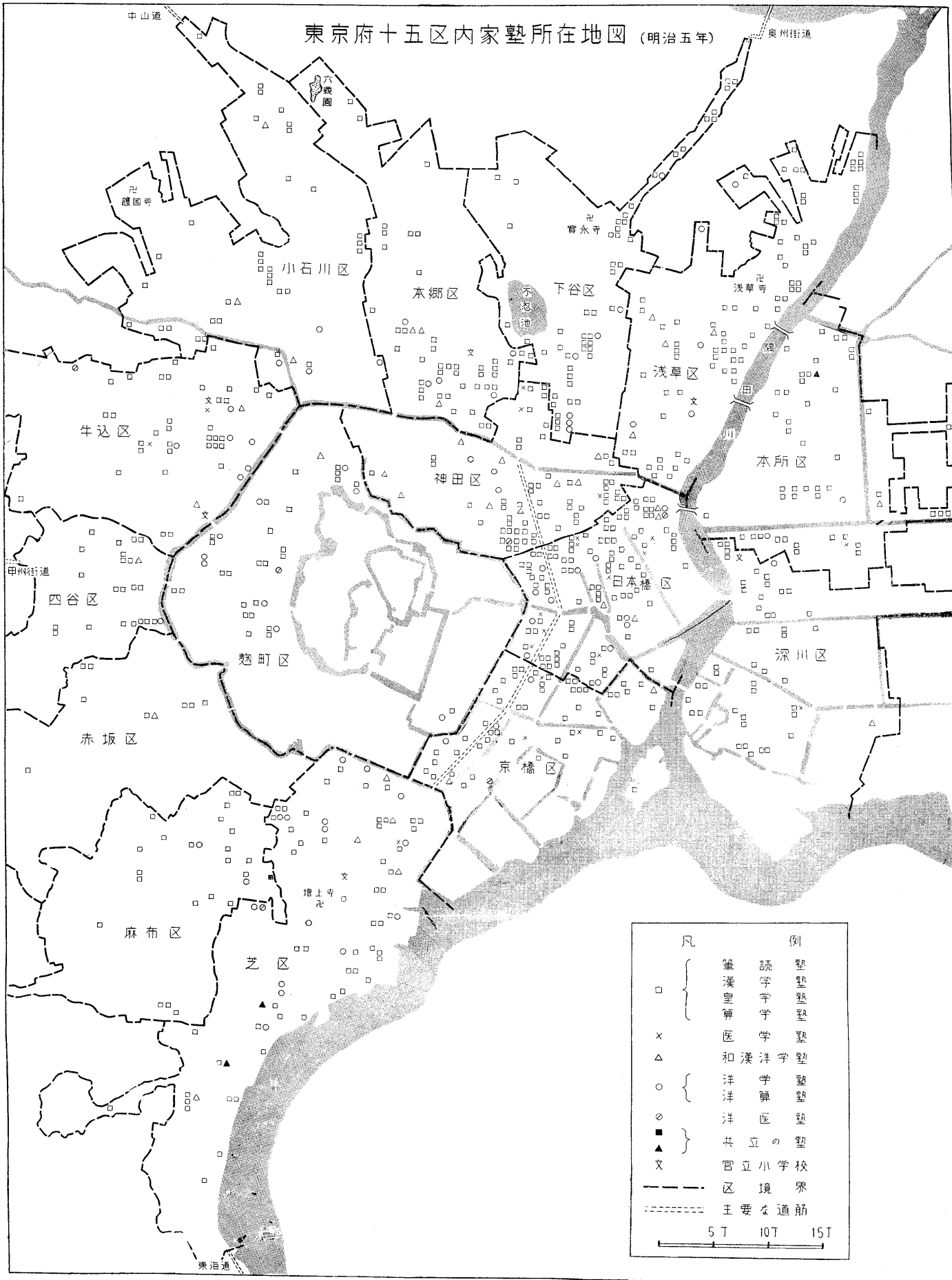
なお明治五年当時の著名な塾・塾主には、日本教育史資料にみられないものも含めて少くないが、本稿では個々の塾について記述することを目的としないので、説明のために例示した以外のものについてはふれなかった。

「東京府十五区内家塾所在地図（明治五年）」は明細調の塾所在地を記号により町名丁目によって概略的に示したものである。なお分塾・出張所の六校もここでは加えてある。

郡部の塾特に区内に接する地域や街道筋、宿場近傍の塾の所在もみなければならぬのであるが、大字名と番地で記載されており、市街地と違って把握難いために記入しなかった。

「文」は明治三年六月に創置された官立小学校六校を示すが、翌四年一二月の記録によって所在地を記入したものである。

東京府十五区内家塾所在地図 (明治五年)



凡	例
□	筆 読 塾
	漢 字 塾
×	算 学 塾
	医 学 塾
△	和 漢 洋 学 塾
○	洋 学 塾
	洋 算 塾
◇	洋 医 塾
■	共 立 の 塾
×	官 立 小 学 校
---	区 境 界
----	主 要 道 筋
5 T 10 T 15 T	

政治・社会の変革と文明開化の謳歌と、学制の頒布とによって教育の新旧の交替が行われつつあった一時期、明治五年から六年にかけての東京の塾の状況と塾を構成する諸元について、明細調によって知りうることを概説した。しかし資料が東京のものであるからという理由からだけでなく、本稿はどこまでも「江戸—東京」における教育・塾について述べたものといわなければならないようである。

しかし東京における諸学の塾の消長は漢才から洋才へと移り変わりつつあった日本の教育観・学問観を最も端的に物語っているといえることができる。

また洋学塾について断片的に述べたが、その発達を歴史的にみるばかりでなく、一時点における断面を把握ることによって洋学に対する人々の関心のもち方、西洋文化の浸透のし方と広さなど、すなわち、文明開化を立体的に解明することができるようである。

註一 文部省第一年报東京府の学事景況報告によると明治六年「当時私

学ノ数五十二所家塾千二百二十八所アリ」計一、一八〇校となる。

海後宗臣教授は「明治五年開学願書」と「明治六年開学願書」

から明治五年末に一、一四六校あったと報告されている。「明治

初年に於ける初等教育の諸相」(教育思潮研究第四卷第一輯)

註二 英学に関しては東京都政史料館「東京の英学」(東京都史紀要

第一六)がある。同書は明細調のほか開学願書その他の資料や文

献により各英学塾の歴史、教則、塾則、教師などについて詳しく

報告している。

註三

「洋学・洋算」のうち日本橋上槇町の日章堂の塾主は、東京府土

族渡辺綱の次男渡辺済一〇才である。学科は英仏洋算をあげてい

る。ところで父の渡辺綱は同じ日本橋檜物町において医学塾を開

業し、西洋医学の心得もあった。日章堂では教師三名を雇い教授

に当らせているので、渡辺済は名儀上の塾主であったと思われる。

そのためここでは除いて計算した。

註四 海後宗臣教授は前掲論文(註一)において、東京府内の塾数が略々

一定していると仮定すれば、幕末から明治初年にかけて新設・閉

塾するものが一カ年に一〇〇校以上にのぼるのではないかと推定

されている。

註五 教職における士族と平民との比較は塾主を比較するだけでなく、教師の数によらなければ不十分であるが、大勢は察知することができる。

明治六年以降の増減については開学願書の調査によって明らかにすることができよう。

註六 外人教師については前掲書「東京の英字」を参照されたい。

註七 洋学塾の塾主の学歴によって在学期間をみると、いずれも一つの塾で学ぶ年月は短く、幾つかの塾で、何人かの教師についている。これは洋学の歴史が浅かったことと、洋学塾の基礎が未だ安定していなかったためである。

明細調の塾主の学歴を一例として挙げる。

芝三田二丁目常教寺において英学・仏学の塾、共学舎を開いた
木更津県土族西野常五（二二才）の学歴

慶応二年三月——同二年八月 佐藤与之助（蘭学）に従学

同 二年十一月——同三年六月 勝安房守に従学

同 三年七月——同三年十一月 佐々木貞庵（仏学）に従学

同 三年十二月——明治二年三月 自学

明治二年四月——同三年六月 箕作貞一郎（仏学）に従学

同 三年七月——同三年一〇月 福地源一郎（仏学）に従学

同 三年十一月——同四年八月 仏人マイヨー、ガローに学

ぶ

なおマイヨーとガローは大学南校の教師であるが、個人的に学んでいたのであろう。